

新しい府大広報の発行について

学 長 竹 葉 剛

「府大広報」は、学内の行事、教員の研究紹介、学生のクラブ活動、卒業生の活躍など、学内情報誌として、非常に重要な役割を果たした。

しかしながら、最近では、インターネットの普及により情報の速報性が重視されるようになり、学内情報でも速報性の高いものはホームページに掲載されるようになってきている。そのため、紙媒体の広報誌には別の役割が期待されるようになってきた。さらに、2004年4月には国立大学が法人化され、公立大学も22大学が今年4月までに法人化された。また、2007年には「大学全入時代」が到来することが予測され少子化・18歳人口の減少の中で大学間競争が激しさを増している。このような状況の中で、昨年度の広報委員会は、紙媒体の府大広報の対象を学内から学外（主に受験生や地域社会・産業界）に移し、発行回数も年3回程度にするとの方針を決めた。適切な判断であると思う。



「府大広報」（入試特集号）は、このような経過で生まれた京都府立大学の新しい広報誌である。本学は、規模は大きくないが、人文科学系・社会科学系・自然科学系それぞれに伝統のある学科をもつユニークな大学である。少人数教育が大きな特色であり、学生は多くの教員からきめ細かな指導が受けられる。クラブ活動も盛んであり、たくさんの友人ができる環境がある。キャンパスは、京都駅から約15分の交通至便で、賀茂川・植物園・コンサートホール・閑静な住宅地に囲まれた、環境抜群の場所にある。今年で開学111周年となる本学の卒業生は、心の豊かさ、人間としての能力の高さ、誠実さで、高い社会的評価を得てきている。私たちは、本学の素晴らしい教育環境を多くの方に知っていただいて、特に高校生には共に学び合う仲間に加わっていただきたい、と願っている。この広報誌が京都府立大学の教育環境を知っていただく契機になればと思う。

目 次

・学長挨拶	1	英語・国語	11
・入試特集号発行にあたって		日本史・世界史	12
本号の構成と利用ガイド	2	生物・化学	13
・学部学科別入試概要		物理・数学	14
文学部	3	・就職支援活動紹介	15
福祉社会学部	5	・府大の名物講義	16
人間環境学部	6	・卒業生の声	18
農学部	9	・担任奮闘記	20
・入試科目別アドバイス	11	・編集後記	20

入試特集号発行に当たって

京都府立大学広報委員会

この冊子は、主として京都府立大学を受験しようと考えている受験生の皆さんに読んでいただくことを念頭において編集されています。あふれるほどの情報がさまざまな形で飛び交う現代社会において、求められる情報が、親しみやすく、また的確な形で、より多くの人に届いて欲しいという思いから、全学

部の全学科・専攻の関係教職員が手作りで作成しました。入学試験に直接関わる情報に始まり、各学部の授業風景、就職情報、担任奮闘記、各学部卒業生の生の声、という具合に、多彩な内容の冊子になっていますので、じっくりと腰を据えて最後の頁まで読んでみてください。

本号の構成と利用ガイド

本号は、入試に関する部分と、それ以外の関連記事の2つの部分から構成されています。
 ※注 出題科目別記事は予想問題ではありません。あくまで参考資料として御利用下さい。

■入試関係の情報■

前半の入試情報は、学部・学科・専攻ごとの入試概要と、一般選抜でセンター試験に続いて本学独自で実施する二次試験で出題される科目の科目別の解説の部分に大きく分かれており、両方を照し合わせて読むことが大切です。志願する学部・学科・専攻が異なっても、同一科目の出題内容に違いはありませんが、学部・学科・専攻によって配点が変わる場合がありますから、注意が必要です。

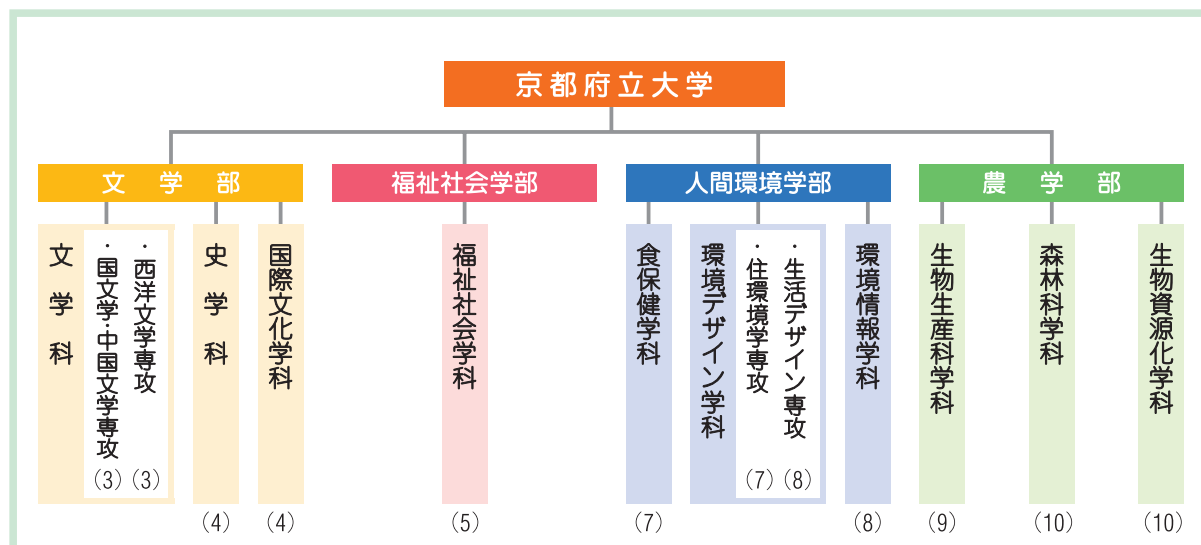
推薦入学やAO入試、また、一般選抜のうち後期日程でも試験を実施する学部・専攻については、該当する学部・専攻のページに、それぞれ概要が紹介されています。小論文等に関する情報はそちらで見ることができますから、見逃さないように注意してください。

■大学生活■

入試情報の次には、大学入学後に関わるページが続きます。各学部の講義の一例や卒業生から寄せられた文章、全学向けの就職支援講座の様子やクラス担任の活動の一端を紹介する記事を通して、京都府立大学での大学生生活に一足早く触れてみてはいかがでしょうか。

なお、入試に関する詳細は、必ず「選抜要項」で確認するようにしてください。また、学部・学科・専攻ごとのカリキュラムの詳細等は、同じく大学発行の「大学案内」に紹介されています。併せて参照してください。

★各学部・学科の詳細は下図の該当頁へ！★



■文学部■

文学部の教育の理念・目標

文学部では、人類の歴史の営みや、その過程で生み出されたさまざまな文化や各地域の言語や文学作品を研究対象にして、それらを受け止め読み解くことのできる専門的能力の涵養を学部全体の教育理念に掲げながら、研究の方法や対象の地域に従って、文学科（国文学・中国文学専攻及び西洋文学専攻）、史学科、国際文化学科の3つの学科に分かれて、それぞれ独自の特色ある研究・教育を行っています。

入試科目

したがって、一般選抜では、センター試験の指定科目や選択科目、二次試験の指定科目である国語・外国語（英語）・地理歴史（日本史または世界史）の配点について、学科・専攻の特性に応じて違いがあります。また、特別選抜でも、京都府内の受験生を対象に、全学科・専攻で推薦入学、国文学・中国文学専攻以外の学科・専攻でAO入試を実施していますが、この場合も、推薦の条件や小論文の有無など選考方法がそれぞれ異なります。詳細は、以下の学科・専攻別の解説及び募集要項等をよく読んで確認し、間違いのないように注意してください。

文学科

		一般入試（前期）	推薦入試	AO入試
国文学・中国文学専攻	定員	20	5	（なし）
	求める学生像	①日本の伝統文化に深い関心を持ち、また中国を中心とする異文化への対応能力を兼ね備えた人 ②自己の人格の陶冶に真摯な態度で臨み、その形成に向けて不断の努力を怠らない忍耐力を有する人 ③学問研究の基本的な能力である思考力を備えた人、なかんずく論理的に秩序立てて物事を考え処理する能力を持ち、その思考力・論理性を的確に表現できる日本語の運用能力を持つ人 ④読解力・記憶力に優れ、その能力を人生の豊かな経験に昇華しようと努める人 ⑤語学に堪能で、異文化との相互交流に関心を持つ人		
	合否判定	センター試験（500点）と2次試験（700点：国語300点、地歴200点、外国語200点）との総合点による判定	推薦書、調査書、国語及び英語試験の成績による総合判定。	
	判定の特徴	国文学・中国文学専攻で提供している教科を理解し、研究を遂行するための基礎学力となる、読解力・記憶力・語学力と、思考力・論理性を的確に表現できる日本語の運用能力とを中心に判定している。	国語学・国文学・中国文学それぞれの分野とともに、三分野の関連性をも重視した教育を行っている。その基礎学力となる、読解力・記憶力・語学力と、思考力・論理性を的確に表現できる日本語の運用能力とを中心に判定している。	
西洋文学専攻	定員	18	5	2
	求める学生像	①言語や文学に強い関心を持ち、日本語と外国語の言語能力を備えた人 ②言語・文学研究という基礎学問に適した、人間と社会に対する深い関心と幅広い視野を持つ人 ③言葉の力や人類が培ってきた様々な思想を理解するための共感能力、柔軟な思考力と問題把握能力を持つ人 ④自ら見出した問題を論理的に考え、表現する能力を備えた人		
	合否判定	センター試験（500点）と2次試験（700点：国語200点、地歴200点、外国語300点）の総合点による判定	推薦書、調査書、英語及び小論文の試験成績による総合判定。小論文は日本語の文章を読んで日本語で答える問題	自己推薦書、調査書、小論文及び面接による総合判定 小論文は英語の文章を読んで日本語で答える問題
	判定の特徴	以下の諸点を判定する。 ・日本語と外国語の言語能力 ・人間と社会に対する理解 ・柔軟な思考力と問題把握能力	以下の諸点を判定する。 ・日本語と英語の言語能力 ・人間と社会に対する理解 ・様々な思想を理解するための共感能力 ・柔軟な思考力と問題把握能力 ・論理的に考え、表現する能力	自己推薦書と調査書によって入学意欲と適性を判定。さらに小論文と面接によって、以下の諸点を判定する。 ・日本語と英語の言語能力 ・人間と社会に対する関心と視野の広さ ・様々な思想を理解するための共感能力 ・柔軟な思考力と問題把握能力 ・論理的に考え、表現する能力

史 学 科

	一般入試（前期）	一般入試（後期）	推薦・AO入試
定員	20	4	4（推薦）・2（AO）
求める学生像	①歴史に強い関心を持ち、人類のさまざまな社会的・文化的活動に広く興味を持つ人 ②歴史研究の基礎となる古文書や外国の文献の読解、遺跡・遺物調査などに根気強く取り組める人 ③自ら見いだした課題を論理的に把握・整理し、また自分の考えを的確に表現できる人		
合否判定	センター試験（600点）と2次試験（700点：外国語200、歴史300、国語200）の総合点による判定	センター試験（600点）と2次試験（歴史200点）の総合点による判定	【推薦】 推薦書、調査書、英語及び小論文の試験成績による総合判定 【AO】 自己推薦書、調査書、レポート、面接及び英語の試験成績による総合判定
判定の特徴	「求める学生像」の欄に記されたような総合的能力に加え、入学後のカリキュラムに対処し得る基礎的学力を備えていることが必要。		「求める学生像」の欄に記されたような総合的能力を有し、かつ学習意欲と問題意識にあふれた学生の入学を期待している。

国際文化学科

	一般入試（前期）	推薦入試	AO入試
定員	15	4	1
求める学生像	①文化を学ぶための必須の能力である言葉に強い関心を持ち、さらにその能力を高めようとする人 ②自分の文化に深い理解と強い関心を持ち、それを基盤としながら、近隣諸地域の文化、世界の文化への関心を深めていく知的好奇心・探求心のある人 ③ただ一つの視点や関心事からだけでなく、多角的な視点や広い視野に立って、柔軟にものごとを見ることのできる人		
合否判定	センター試験（600点）と2次試験（600点：国語200、歴史200、外国語200）の総合点による判定	推薦書・調査書・国語及び英語の試験成績による総合判定	自己推薦書・調査書・国語及び英語の試験成績による総合判定
判定の特徴	国際文化学科は人文科学の学科である。学科の理念に基づく科目の学習や研究のための基礎学力を判定している。	推薦書・調査書により、受験生の当学科への入学意欲と、問題意識及び適性をみている。また学力試験により、学科の理念に基づく科目の学習や研究のための基礎学力を判定している。	自己推薦書・調査書により、受験生の当学科への入学意欲と、問題意識及び適性をみている。また学力試験により、学科の理念に基づく科目の学習や研究のための基礎学力を判定している。

■福祉社会学部■

福祉社会学部の教育の理念・目標

福祉社会学部は、これまでの社会福祉の枠組みを越えて、『受ける福祉』（利用する福祉）だけでなく、生涯発達と住民参加の視点に立った主体的な『創る福祉』を展望することを基本理念としています。このような理念を実現するためには、社会と人間に関する幅広いアプローチが必要となります。それらを次の3つに整理しています。

- ①人間の共同生活を構成する法律・経済などの諸領域からなる社会システムを分析し、人々の生活を運営する方法や政策を学ぶこと。
- ②人間が直面する様々な生活問題やニーズに具体的に対応して、人々の生活を支援する方法と実践のあり方を探求すること。
- ③人間の成長や発達、行動や相互作用について科学的に理解すること。

福祉社会学科

	一般入試		推薦入試	AO入試
定員	前期 40	後期 12	15	3
求める学生像	①社会の発展と現代社会の制度・政策的課題の解明に関心をもつ人 ②人間の福祉と社会的連帯のあり方に実践的な関心をもつ人 ③人間の発達と行動、教育と社会形成の課題の解明に強い関心をもつ人 ④地域と社会の現実的問題の解決に実践的に取り組んでいきたいと考える人			
合否判定	センター試験では5教科5科目600点、2次試験では、国語（国語総合・現代文・古典）、英語（英語I、英語II、リーディング、ライティング）の2科目400点の総合点による判定により、合格者を決定する。	センター試験（前期同様、5教科5科目）600点、小論文400点の総合点による判定により、合格者を決定する。	推薦書、調査書及び小論文による総合判定により合格者を決定する。	①調査書及びテーマ作文により予備選考を行い、15名程度の予備選考の合格者を決定。 ②予備選考の合格者に対し、レポート作成、集団討論及び面接を実施し、出願時に提出された書類の内容を含めた総合判定により、合格者を決定する。
判定の特徴	センター試験、2次試験での科目指定等により、学部での学習に求められる次のような基礎的力を判定します。 ①高等学校での基礎的諸教科（国語、数学、英語、地理歴史、公民、理科）のそれぞれについての、十分な学力。 ②社会問題を様々な角度・視点から観察し、客観的・科学的に分析する基礎的能力。 ③物事を論理的に考え、自分自身の意見を持ち、それを整理して表現する能力。 後期試験の小論文問題（18年度）では、種々の分野から題材が選ばれ、①大意を読み取ること ②筆者の主張について例をあげて考察すること ③統計資料の読み取りなどを課している。いずれも指定された字数の範囲内で、簡潔で的確な記述を求めている。またこれまでの出題では、題材のテーマに関して「自分の考え」が求められることも多く、その場合、自分の体験などに基づく具体的な論証が重要である。		18年度の小論文では、異なるタイプの設問、異なるジャンルの文章を素材に、論理的思考力、的確な文章表現力をできるだけ多角的にとらえることを意図した出題となっている。日ごろから、社会事象について書かれた一定量の文章を読むことや、各種白書類の統計データに関心を持つなどの心がけが重要である。	社会的事象への関心を日ごろから持っていることや、社会問題となっているテーマについて、その解決方策等について自分なりに考えをめぐらせたり、友人と議論を交わすなど、日常のコミュニケーションの中に社会的な要素を持っていることなどが、選考に当たる側からは期待される。独創的な発想や、学校での自治的・自主的活動の経験などが試される。

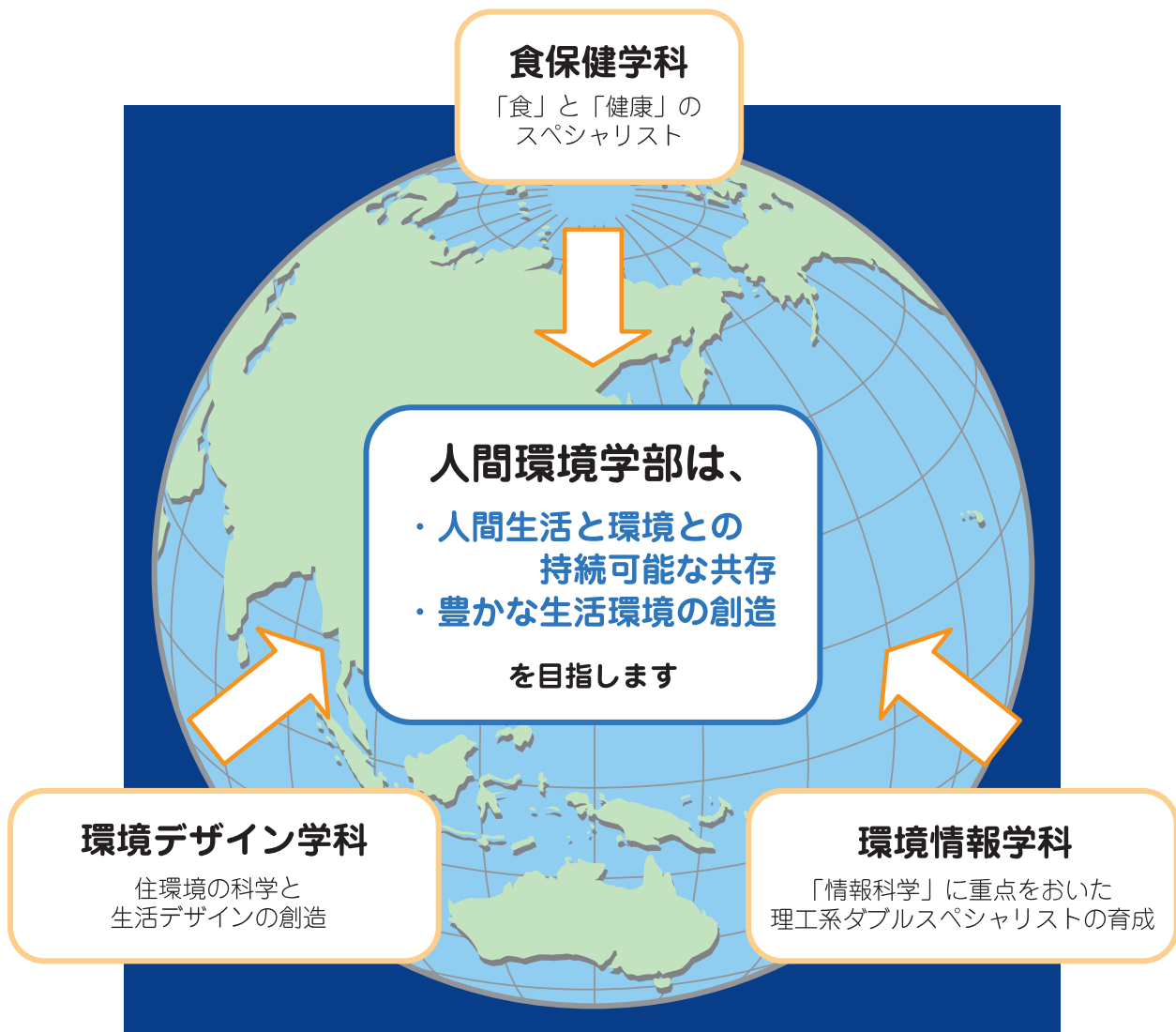
■人間環境学部■

人間環境学部の教育の理念・目標

人間環境学部では、人間生活と環境との持続可能な共存の可能性を探りながら、豊かな生活環境を創造するための研究・教育を行うことを理念・目標としています。そのために各専門分野における基本的な知識と技術習得や面白さの体得に加えて、課題を発見し、その本質を捉える能力、解決する能力を養うとともに、それらの内容を的確に表現する能力を磨く教育を行います。人間環境学部は、人間の生存を支える食環境を研究する食保健学科、人間生活の場である住環境や地域環境を科学的に分析し、創造する環境デザイン学科、人間をとりまく自然環境・情報環境を研究する環境情報学科から成り立っています。各学科の求める学生像と入試の詳細は、以下の各項目を参照願います。

推薦入試と平成19年度入試の特徴

3学科共に特別入試として推薦入試制度を設けています。また、食保健学科では、昨年度に続きAO入試も実施します。さらに、環境デザイン学科では、推薦枠をこれまでの1校1名から2名に拡大します。一方、環境情報学科では、一般入試二次試験の理科および数学の配点をそれぞれ、これまでの200点から400点にします。



食保健学科

	一般入試 (前期)	推薦入試	AO入試
定員	18	5	2
求める学生像	①「食」に深い関心をもち、その課題発見と解決に寄与する意欲のある人 ②「食」を通じて、日本と世界の人々の健康の保持・増進に貢献できる人 ③「食」を多面的・総合的に把握しようとする人		
合否判定	センター試験 (700点) と 2 次試験 (300点: 理科 200、外国語 100) の総合点による判定	推薦書・調査書・面接及び小論文の試験成績による総合判定	自己推薦書・調査書・面接及び小論文の試験成績による総合判定
判定の特徴	食保健学科は、理系の学科である。「食」と「健康」の分野でのスペシャリスト養成の教育を実施しており、所定単位修得により管理栄養士国家試験受験資格が得られる。 従って、このような学科の教育を受けるのに必要な基礎学力を判定する。	小論文では、与えられた課題に対する論理的な思考力、分析力、意見をまとめる力などを、文章表現力とともに評価する。 また面接により、勉学意欲と管理栄養士としての適正を判断する。	自己推薦書により、受験者の当学科への入学意欲と「食」への関心の深さをみる。 小論文では、与えられた課題に対する論理的な思考力、分析力、意見をまとめる力、などを、文章表現力とともに評価する。 また面接により、勉学意欲と管理栄養士としての適正を判断する。

環境デザイン学科 (住環境学)

		一般入試 (前期)	推薦入試
住環境学専攻	定員	20	5
	求める学生像	①広く深く住環境に関心をもち、その課題発見と問題解決に寄与する意欲のある人 ②良好な住環境の創造に必要な、自然・社会・人文諸分野にまたがる専門科目に対する幅広い関心を有する人 ③住環境学を多面的・総合的に把握しようとする意欲をもつ人	
	合否判定	センター試験 (600点) と 2 次試験 (200点: 理科 100、外国語 100) の総合点による判定	推薦書・調査書・活動報告書・面接及び小論文の試験成績による総合判定
	判定の特徴	基礎学力を、入学後の教養科目・専門教育習得の前提をなすものとみなし、その習得の度合いを判定している。 二次試験では、英語を、いわゆる理系・文系に共通する基礎科目として、理科は、専門教育における自然科学系科目における基盤的な素養として位置付け、その基礎的な学力を判定している。	面接では、専門に対する勉学意欲や抱負、問題意識を重視し、同時に高校の内外における特記すべき取り組みなども、活動報告書とともにみる。小論文では、与えられた課題に対する論理的な思考力、分析力、意見をまとめる力、などを、文章表現力とともに評価する。

環境デザイン学科 (生活デザイン)

		一般入試 (前期)	推薦入試
生活デザイン専攻	定員	12	3
	求める学生像	①生活者の立場から広く生活デザインに関心を持ち、その課題発見と問題解決に寄与する意欲のある人 ②良好なプロダクト、ランドスケープ、アパレルの創造に必要な、自然・社会・人文諸分野にまたがる専門領域に対し幅広い関心を有する人 ③生活デザインを多面的・総合的・科学的に把握しようとする意欲をもつ人	
	合否判定	センター試験 (600点) と 2次試験 (200点: 外国語 100、美術 100) の総合点による判定。	推薦書・調査書・活動報告書、面接及び小論文の試験成績による総合判定。
	判定の特徴	基礎学力を、入学後の教養科目・専門科目の学習の前提をなすものとみなし、その習得の度合いを判定する。 2次試験では、英語を、いわゆる理系・文系に共通する基礎科目として、美術 (実技) は、専門教育における基盤的な素養として位置付け、その基礎的な学力を判定する。	面接では、専門に対する勉学意欲や抱負、問題意識を重視し、同時に高校の内外における特記すべき取り組みなども、活動報告書とともにみる。小論文では、与えられた課題に対する論理的な思考力、分析力、意見をまとめる力などを、文章表現力とともに評価する。

環境情報学科

		一般入試 (前期)	推薦入試
	定員	20	5
	求める学生像	情報科学に重点を置いた理工系分野で世界に通用する専門家となるためには、まず好奇心と論理的思考能力と表現力が必要です。各理系科目を暗記ではなく理解して、自分の言葉でその内容を語る能力があるかを重要視します。柔軟な発想のもとに思考する創造性豊かな人や社会に役立つ物質の創生、新しい技術の開発に夢を持っている人を、ポテンシャルが高い人と考えています。そして、環境問題に強いシステムエンジニア、生命科学に強い情報技術者、情報技術に強いバイオエンジニア、情報技術に強い材料技術者、情報技術に強い物理計測エンジニアや各分野の研究者を目指す意欲的な人を求めます。	
	合否判定	センター試験 (600点) と 2次試験 (800点: 数学 400、理科 400) の総合点による判定	推薦書、調査書、面接及び小論文試験の成績を総合して選考
	判定の特徴	環境情報学科では、新しい次代を担う理工系「ダブルスペシャリスト」を育成する。そのために、学科で提供している様々な理工系科目や数学科目のための基礎学力を判定している。	理工系の総合知識および思考能力を問う問題を課し、論理的かつ総合的な問題解決能力を判断する。また面接により、勉学意欲と理工系学生としての適正を判断している。

■農学部■

農学部の教育の理念・目標

● アドミッション・ポリシー、求める学生像

農学部は「生物（生命）」と「環境」を共通のテーマとして、安心・安全な生物生産、環境調和型、持続型の生物資源の確保、生物資源の高度利用、地域と国際社会への貢献を理念として、生物生産科学科、森林科学科、生物資源化学科の3学科で構成されています。この理念を達成するために、各学科とも、国際的に通用する専門性、技術および課題探求能力を養うとともに、豊かな教養と基礎的な専門知識を有し、幅広い視野と社会に対する適応力に優れた人材を育成することを目標としています。

農学は主に理系の総合科学であるため、入学後の基礎理系科目の講義を理解するための基礎学力は必要としますが、大切なことは詰め込まれた知識の多さではなく、思考力、応用力を持ち、自ら考える能力を有することです。さらに、自然・科学技術・農学に対する興味・関心や、勉学意欲が大切です。こうした能力や、興味・関心を持った学生諸君のご入学を心から歓迎いたします。

● 入試科目

一般選抜入試で課している教科・科目の詳細は募集要項をよく読んで確認し、間違いのないようにしてください。前期日程試験では、センター試験で国語、地歴・公民、数学、理科、外国語の5教科を課しており、第2次試験で外国語と理科を課しています。

後期日程試験では、各学科とも2次試験は課しておらず、センター試験のみで選抜します。ただし、センター入試で課している教科・科目は学科によって異なりますので注意してください。

● 推薦入試

農学部では特別選抜制度として推薦入学者を対象とした入試を実施しています。選抜方法は各学科とも、推薦書、調査書、志望理由書、面接及び総合問題（高等学校の英語、数学、理科について理解力、思考力を見る）の試験成績による総合判定によって合否を決定しています。なお、募集人員、一つの高等学校が推薦できる人員及び京都府内枠と全国枠の募集人員は、学科によって異なりますので、募集要項等をご参照下さい。

生物生産科学科

	一般入試	推薦入試
定員	前期 21人・後期 10人	9人（府内枠6人、全国枠3人）
求める学生像	①食料を中心とした生物生産や環境保全、さらにそれらの社会経済的側面などの課題に対して、自然や生命のすばらしさに共鳴する感性を持って多面的にアプローチするための好奇心とチャレンジ精神を持つ人 ②そのために必要な基礎学力があり、自ら積極的に学習しようとする意欲的な人 ③将来、大学院等への進学、地域農業の活性化や国際的な活躍を志向する人	
合否判定	前期日程：センター試験（900点）と2次試験（500点：理科300、外国語200）の得点による総合判定 後期日程：センター試験（600点：数学200、理科200、外国語200）	推薦書、調査書、志望理由書、面接及び総合問題（高等学校の英語、理科、数学について理解力、思考力を見る）の試験成績を総合して選考
判定の特徴	本学科における教育研究を遂行するための基礎学力判定である。	生物に関する科学・技術を勉強する上で必要な基礎学力や論理的思考力、ならびに食料生産や環境保全についての興味・関心や、学習意欲を判定する。

森林科学科

	一般入試	推薦入試
定員	前期 20人・後期 6人	9人 (府内枠 6人・全国枠 3人)
求める学生像	①自然や科学に対する興味と探究心を持ち、森林に関する課題を積極的に学ぼうとする人 ②そのために必要な基礎学力を持つことは重要であるが、知識のみではなく、論理的に物事を考え、さらには、広く社会の状況を把握できる人 ③学んだ知識を生かして、森林に関わる諸分野における活躍を志向する人	
合否判定	前期日程：センター試験(900点)と2次試験(500点：理科300、外国語200)の得点による総合判定 後期日程：センター試験(900点：国語200、地歴・公民100、数学200、理科200、外国語200)	推薦書、調査書、志望理由書、面接及び総合問題(高等学校の英語、理科、数学について理解力、思考力を見る)の試験成績による総合判定
判定の特徴	高等学校での基礎的教科についての広い学力と、自然科学の学習を深め、研究を行うために必要な理系科目と外国語の学力を判定する。	自然科学を勉強する上で必要な基礎学力と論理的な思考力、自然、森林に対する興味と探究心ならびに社会状況を把握する力を判定する。

生物資源化学科

	一般入試	推薦入試
定員	前期 23人・後期 6人	6 (府内枠 3人・全国枠 3人)
求める学生像	①生命物質とその機能を分子、細胞、個体のレベルで化学的に解明することを目指す「生物化学、分子生物学、遺伝子工学、環境化学領域」の研究者を志向する人 ②食の機能性や安全性、生物による有用素材・物質創製に関心があり、「食品・発酵、製菓、化学素材・化粧品、化学分析等」の業種へ就職を志向する人 ③化学をはじめとする理科に興味をもち、論理的に思考・表現ができ、自主的・創造的で人間性豊かな人 ④勉強意欲と向上心を持ち、厳しい学力評価に耐えうる心構えのある人	
合否判定	前期日程：センター試験(900点)と2次試験(500点：理科300、外国語200)の得点による総合判定 後期日程：センター試験(800点：国語200、数学200、理科200、外国語200)	推薦書、調査書、志望理由書、面接及び総合問題(高等学校の英語、理科、数学について理解力、思考力を見る)の試験成績による総合判定
判定の特徴	入学後の学習や研究のための基礎学力を判定する。	生物資源化学科は、「化学」を基礎に生命化学や環境化学からバイオテクノロジーに及ぶ幅広い研究を行っている。そのため、「成績優秀な者で、化学を履修している者」を推薦条件としている。

入試科目別 アドバイス

一般選抜二次試験

学部学科の紹介に続き、昨年度の入試問題出題者から受験生の皆さんに向けてのコメントを、主な入試科目別に集めました。出題の形式をはじめ、受験生の皆さんに気をつけていただきたいこと、志望する方への思いを語っていただきました。

※以下の文章は主として昨年度までの問題について書かれています。今年度の予想問題ではありませんので注意してください。

英語

文学部

福祉社会学部

人間環境学部 ※

農学部

※環境情報学科は除く。

英語は全学部共通の問題を出しています。どの分野を勉強するにも必要な基本的な語学力を試しているからです。ですから特別難しい問題は出していません。高等学校レベルの勉強をきちんとしていれば解ける問題です。

形式としては記述式の問題中心で、全文または部分和訳、および内容把握の英文問題が3題程度、和文英訳の問題が1題です。

和訳、内容把握の問題では、構文を理解し、文脈の中での単語の意味を的確に読み取り、内容を考えて正確に理解する習慣を身につけてください。そのために文法の勉強は欠かせません。英作文では、日本語をそのまま英語に置き換えるのではなく、英語で考えて、英語らしい英文を書くように心がけてください。正しい綴りで書くことが求められるのは言うまでもありません。

どの問題も、小手先のテクニックで解ける問題ではありません。真の学力をつけるよう日頃から勉強してください。

また、日本語、英語ともに字は丁寧かつ正確に、伝えたい内容が読み手にわかるように書くようにしてください。

国語

文学部

福祉社会学部

国語はすべての学習・研究の基本となる科目です。大学で学ぶには、言語の理解と表現の力が十分に成長していることが、成果を上げるための基礎条件となります。

まず、表現されている内容を論理の筋道をたどってしっかりと理解できること、そしてそのことを自分の言葉で表現できることが必要です。「現代文」の問題は、この最も重要な力を見るのにふさわしいものです。問題文で表現されている内容を、筆者の使用する言葉の意味をきちんと理解した上で、文脈をとらえられているかどうかを問う設問が多いのはこのためです。その際、問題文の言葉を鸚鵡返しに使うのではなく、自分自身の言葉で的確に表現できるようにしてください。借り物の他人の言葉では、理解していることにはなりません。

「古文」・「漢文」では、文章の筋道あるいは物語の展開などを把握するために、省略されがちな動作の主体や、代名詞や官職であらわされる人物がだれを指しているのかをつかまねばなりません。それには、現代とは異なる文法や語法を理解しておく必要があります。文の組み立ての基本ルールである文法は、しっかり勉強しておいてください。

古典語は現代語とは意味の異なる場合が多いのですが、その語の基本の意味をよく理解しておけば、場面・文脈によって訳し方がおのずから異なってくるはずで、現代語に訳した場合、それが現代語として自然な表現になっているかどうかを考えてください。

また、「古文」・「漢文」の場合、知識として「記憶」しておかなければならない「ことがら」があります。文法も含め、暗記・記憶をおろそかにしないこと。これらの知識が考える材料となるのですから。漢文独自の語法や、古典和歌の約束事などをきちんと身につけ、時代背景についても知識を持っておくことが大切です。

そして解答を書く文字は誤読を生じないよう丁寧に。我々に皆さんの実力を伝えてください。

■ 日本史

文学部

【出題のねらい】

原始古代～近・現代の範囲から、政治・経済・文化など広い分野にわたって問題を出題する。歴史の流れやできごとの背景を考える力を重視し、設問においても大きな流れが捉えられるように工夫している。さらに、歴史の根拠となる史資料に対する理解も重視しており、その読解力をためす問題を出題する場合もある。また、記述式の問題では、文章表現の的確さや論の進め方なども評価の対象としている。

【受験生へのアドバイス】

特定の時代や分野に偏ることなく、日本史全体に目を配って勉強を進めることが大切である。そして、単なる歴史用語の丸暗記ではなく、歴史的なできごとの因果関係や背景について理解を深め、大きな流れとして歴史を捉えることを推奨したい。また記述にあたっては正確な表現ができることも重視しており、緻密で丁寧な勉強を心がけるようにしてほしい。

■ 世界史

文学部

世界史の問題は、教科書で学習した内容・範囲を基礎に、世界各地の歴史を古代から近現代にいたるまで、できるだけ偏りのないように出題している。難問・奇問は出題しない方針なので、教科書の内容をじっくり学習しておくことを勧める。

出題形式は、記述式と論述式とを併用している。したがって、人名・地名など固有名詞の漢字・カタカナ表記を正確に記述できるよう準備しておく必要がある。また論述形式では、歴史的イベント・事物・制度について、大局的な観点から、その歴史的意義について問うことが多いので、関係する人物・年代についても整理し、要点をおさえて筋道だった表現ができるよう学習しておくことを勧める。

昨年度は、古代から現代にいたるまでの西洋史を中心とする記述式の総合問題、西アジア・南アジアの古代史に関する記述式の問題、並びに論述式の問題として200字の制限をもうけて対抗宗教改革に関する問題、史学科についてはさらに、字数制限をもうけないで18世紀以降のイギリスによるインドの植民地化に関する問題を出題した。

記述式の問題に関しては、人物・事件・制度・年代などの歴史的諸事項について、受験生がどこまで正確な基礎知識をもっているかを把握することを目的とした。また論述問題は、特定の地域・時代に関する歴史的事項について、その歴史的変化・推移に対する受験生の正確な理解度と適切な表現力をみることを目的として出題したものであった。

生物

人間環境学部（選択科目）※ 農学部

※生活デザイン専攻は除く。

生物Ⅰ・生物Ⅱの全ての分野から出題する。細胞、植物、動物の生理や生態、遺伝に関する出題が主体である。

例年、教科書レベルの知識を問う基礎的な出題のほかに、図表で示されたデータの読み取りと解釈力を問う論述式の問題も出題する。前者においては、空所補充形式、短い記述式の出題形式をとる。

教科書や副読本をじっくりと学習し、単なる用語の暗記におわるのではなく、その意味やほかの用語との関連について理解しておくことで対応可能になる。後者のように実験データの図表による表示と読み取り能力・解釈力を問う設問では、図表によるデータの表示形式になれていることが必要であり、ことに計算も間違いないことができる様に練習が必要であろう。

図表の解釈をめぐって論述式の解答を要求することが多いが、短い文章で要点を的確に書けるように、特に出題の趣旨に応じたキーワードの選択と文章中への適切な配置が要求される。論述式の解答能力は、理系においても大学進学後極めて重要視される能力であるので、その点に関する受験生の能力を見極めたい。

化学

人間環境学部（選択科目）※ 農学部

※生活デザイン専攻は除く。

内容と形式

化学Ⅰ、化学Ⅱの全範囲から出題します。化学Ⅲについては選択内容を履修していない場合にも不利にならないよう配慮します。

知識の正確さを問うための選択問題や穴埋め問題、理論的な理解の深さと正確さを試す計算問題、さらに、考える力を試すための論述問題を取り混ぜています。また、グラフや実験装置の図を使った問題は知識の正確さと考える力を試すことができるため、しばしば出題されています。

出題者からのコメント

全範囲をまんべんなく勉強しておくことが不可欠です。計算問題では公式に当てはめて機械的に計算・解答するのではなく、与えられた数字から何をどうやって導出するかを、順を追ってわかりやすく記述できるよう十分練習しておきましょう。教科書に出ているグラフは必ず頭に入れ、このパラメータを動かしたらグラフはどうなるのだろうか？ という考えを巡らせることができるようにしましょう。論述問題では説明の要となるキーワードをまず考え、わかりやすく文章化する練習をしましょう。教科書に出ている実験装置の名称や使用法は必ず頭に入れましょう。発展内容やコラムにも必ず目を通し、新聞の科学欄や科学雑誌、テレビの特集番組で最新の情報に目を向けるよう、日頃から心掛けて下さい。

出題方針

農学部と人間環境学部では広い範囲の分野に分かれて専門科目を学んでいきますが、物質を扱う学問である化学は全ての専門科目の重要な基礎となります。したがって、本学の化学入試問題は、高校化学の知識が十分に得られているかどうかを試すための出題を心掛けています。

出題は化学、生化学、食品化学などを専門とする先生方が担当し、高校の教科書を徹底的に分析して問題を作成します。問題はいずれも基本的な知識がしっかりと身に付いていれば解答できるものです。しかし、高校化学の知識や理論で解釈できるものではあっても、扱う対象はなるべく広い範囲から選び、本学のアドミッションポリシーに関連した最新の内容を取り混ぜるよう心掛けています。

物 理

人間環境学部（選択科目）※ 農学部

※生活デザイン専攻は除く。

内容と形式

教科書の基本的・標準的な内容を理解していれば大方解ける内容である。空欄を埋めるとか答えだけを求める問題は少なく、考え方を記述する問題が多い。問題は小問に分けられており、基礎的知識を問う問題からやや考えさせる応用問題までを含んでいる。計算量が多い場合もあり、正確な計算力が求められる。

出題者からのコメント

基本的な内容をしっかり理解しておくことが大切である。基本的な知識を問う問題には間違えず答えられるように教科書を学習してほしい。応用問題では基礎的理解に加えて物理現象に対する理解度が問われる。解答の考え方の部分はかなり丁寧にみるので、解答者の考え方を簡潔かつ的確に伝えられるような答案の書き方が出来るようにすることが望まれる。

出題方針

基本的な知識を問う問題と応用的な問題を適度にバランスさせて出題する。応用問題では物理現象を正しく理解していないと正解を得られないような問題を出題する。応用問題の出題水準は難問を避け、標準的なものとする。

数 学

人間環境学部 環境情報学科

内容と形式

基本的な内容を十分理解しているかを試す問題を全範囲から出題する。教科書の内容を理解し、論理的な思考力があれば解けるようにしている。大問4題程度を出題する。解答の過程も採点対象とできるようにするため、すべて記述式の問題とする。

出題者からのコメント

計算量の多い問題などを通じて、基本的な事項に対する確実な理解がなされているかを試している。また、場合分けが必要となる問題などを通じて、論理的思考力を試している。

問題に対して完全には解答できていない場合には、答案の記述内容に応じて部分点をつけている。その際、意味不明の記述には部分点をつけられない。このため、記述式の問題の答案を丁寧に書く練習をしておくことが望ましい。答案の添削指導を受けることを勧める。

大問が複数の小問で構成されている場合には、各小問を解くことを通じて引き続く小問の解答ができやすいように誘導している場合がある。

出題方針

問題のレベルは教科書の章末問題程度が、それよりやや高めに設定している。

出題範囲の内、数学Ⅲ、数学Cに該当する問題を適度に多めに出現する場合がある。

就職支援活動紹介

学務課学生係

本学では、毎年度、10月から12月の時期を中心に、主に3回生を対象とした「就職講座」を10回程度開催しています。

内容は、インターネット活用法、エントリーシートや履歴書の書き方、模擬面接等の講習をはじめ、就職適性検査、一般常識・エントリーシートの模擬試験、4回生による就職活動体験報告など多彩な内容となっており、受講者からも、これから本格的な就職活動を進めていくうえで大変役に立つと好評です。

昨年は、初めての取組として11月17日に学内で「企業研究セミナー」を開催しました。

セミナーには各業界を代表する15社に出展していただき、参加学生は他大学を含めて約330人の多数に上りました。予想以上の参加者となったため、会場は一時、通路まで埋まってしまうような状況になりましたが、各ブースは出展企業からの会社概要説明や学生との質疑応答などで賑わっていました。

参加した学生の9割以上が参考になったと回答しており、「これから本格化する就職活動に向けて非常に参考になった」、「自分とは無縁と思っていた企業に対する関心が高まった」、「企業と直接触れ合うことで、就職活動の空気を生で感じることができた」などの感想が寄せられています。

その他、各学科・専攻の就職担当教員の企画によるOBを招いて職場の話を聞く就職講座、学内

での「公務員試験対策講座」(有料)のほか、公務員・教員等の採用試験説明会も随時開催しています。また、最近の面接で実施されることが多いグループディスカッション対策にも取り組んでいます。

さらに、今年度からは、企業の採用・人事担当経験者を相談員として招き、学生の個別の相談に応じる就職相談を新たに開催するなど、就職支援の充実に努めています。

平成17年度に行った就職講座

月 日	内 容
① 8/ 8	オリエンテーション 講演(講師:キャリアコンサルタント 本田勝裕氏)
② 10/ 6	インターネット活用法 (講師:(株)毎日コミュニケーションズ)
③ 10/13	就職に失敗しないための情報収集術 (講師:(株)日本経済新聞社)
④ 10/20	就職模擬試験(一般常識)
⑤ 10/27	エントリーシートの書き方 (講師:(株)ディスコ)
⑥ 11/10	就職活動体験報告(4回生11名が発表)
⑦ 11/17	学内企業研究セミナー
⑧ 12/ 1	履歴書の書き方・マナー講座 (学)大和学園)
⑨ 12/ 8	模擬面接 (講師:人事コンサルタント 石田秀朗氏)
⑩ 12/15	就職活動直前対策講座 (講師:キャリアコンサルタント 本田勝裕氏)



府大の名物講義

京都の文学Ⅰ・Ⅱ

文学部文学科 国文学・中国文学専攻 藤原 英城 助教授



江戸時代の文学がそれまでの時代の文学と大きく異なる特徴の一つは、文学が商品として作られるということです。文学が商品として成立するためには、本（商品）の大量生産が不可欠となりますが、それを可能としたのが印刷術と本屋・出版業の確立でした。

それまでの文学は、例えばよくご存知の『源氏物語』にしても、一冊一冊人から人へと手書きで書き写されて（写本〔シャホン〕）読み継がれてきました。写本による文学のあり方は「伝言ゲーム」と同じです。人から人へと伝わるうちに伝言が微妙に変化し、最後にはオリジナルな伝言とは似ても似つかない、とんでもない内容となって大爆笑という例のゲームです。正確に次に伝えようとしても間違ってしまうのですが、中には必ず一人や二人ウケをねらって故意に改変して伝える者もいます（何を隠そう私がそうでした）。

十人に伝われば十種類の微妙に（あるいは大胆に）相違する本文（テキスト）が存在し、一番最後に伝わった本文を私たちは今読んでいる、つまり原作者から見れば大爆笑ものの作品を古典としてありがたがって拝読させていただいているのかもしれない。皆さんが教科書で読む『源氏物語』は紫式部の書いたものではなかった！？なんて想像できますか。

印刷による本（版本〔ハンボン〕）では作者の原稿が印刷されますので、「伝言ゲーム」のようなことはほとんど起こりません。しかし、本は商品として製作されるため、本屋を中心とする作者以外の人々の商売上の思惑がからみ、本が売れるための様々な工夫が施されます。その代表的な一つの試みが挿絵です。挿絵は江戸時代になって、本が商品として製作されるようになって初めて出現しました。挿絵はあってもなくてもいい「刺身のツマ」と思われがちですが、本文以上に重要なメッセージを読者に発信している場合があります。西鶴などは挿絵の効用を十分に意識した作家でした。

3回生配当講義「グループワーク」

福祉社会学部 中村 佐織 教授

この講義は、学生と先生と一緒に作り上げる講義です。なぜなら、単に先生の話聞くだけでなく、学生が楽しめる課題が盛りだくさんだからです！たとえば、写真は講義中のものですが、学生がグループで課題に取り組んでいる様子です。このときは、心理テストを題材に学生同士がディスカッションをおこないました。先生は、グループでのディスカッションを聞き、あるときはユニークな、またあるときは「なるほど！」と思わせるようなコメントをしています。そして、学生の意見を尊重し、評価してくれるのも中村先生の大きな特徴です。また、中村先生は「教室は舞台」をモットーとしていて、服装を「衣装」と考えています。毎回先生のファッションチェックをしている学生も多いのではないのでしょうか。そうした意味でも学生を楽しませてくれる先生です。

中村先生のこうした講義は、じつは隠れた努力の賜物なのです。どうすれば学生が退屈しないか、どうすれば講義の内容を理解しやすいか、どうすれば学生が寝ないか、ということを常に意識して講義に臨んでいます。また、そのためにはどのような講義をすればよいかを、日夜研究しています。中村先生の学生想いでやさしい気持ちが、このような名物講義を生み出しているわけです。

それでは最後に、中村先生からのメッセージを紹介します。

「学生の皆さんには、ぜひ講義に参加し、あらゆる場面で『気づき』のセンスを磨いてもらいたいです。それは“学ぶ力”になるはずですよ。特に、社会福祉の仕事に興味のある人には、実践力に結びついていきますよ！」

皆さんは、『気づき』のセンス、“学ぶ力”、実践力という言葉をどのように受けとめたでしょうか。少しでも興味をもった人は、この講義に参加することをおすすめします。きっと、あなたの役に立つものとなるでしょう。

（文：河野 高志 福祉社会学研究科 博士前期課程2回生）



住宅・都市行政論

人間環境学部環境デザイン学科 住環境学専攻 宗田 好史 助教授

この講義は、まちづくりコーディネーターとして、まちの中で住民の皆さんと一緒に活動する際に、どのようなスキルが必要なのかを知り、学ぶことができます。スキルとは、大きく二つに分けられます。それは「都市計画能力」と「気づき」です。

まずは都市計画能力です。都市計画の基本、例えば法律制度、現在の町の実状、また今後はどこに向いていくのか等、京都市内、府内の事例を取り上げて学びます。町家や町並みを守ろうとすれば、建てられた当時の時代背景や、その後続けられた生活の様子、文化を知り、またどのように現在の制度ができたのか、今何が求められているのかを考えることができます。その際、先生は私たちでも知っている映画などを例にとり話をされるので、「あぁなるほど」と分かることがたくさんあります。

次に、「気づき」です。これは実際の現場でないと分からない事かも知れませんが、多様な人間関係の中で、まちづくりをコーディネートしていく時に、どんな問題が起きるのか、人間関係づくりには何が必要なのかを学びます。講義では、発展途上国で使われているコーディネーター養成の実践キットを使います。例えば、数枚の絵を用いてストーリーを考えて物語を作り、学生がそれを即興で発表します。このように、学生が常に机に座って講義を聴くだけでなく、実際にやってみます。その後先生が自分の体験に基づいて、これがどんな場面で起きるのかを話して下さるので、今やったことがこんな場面で役立つことが分かります。人の表情や言葉には多くの背景、意味が含まれており、自分のアンテナをフル活用して、周りを観察し気づいていく力が求められます。その力が養われます。

最後になんといっても、この講義の一番の魅力は先生の話術です。一旦、話が始めると、どんどん話は膨らみ、引き込まれていきます。私達は先生の話に釘付けになってしまうのです。

(文：庄司 晶子 人間環境科学研究科 博士前期課程2回生)



化学通論Ⅱ

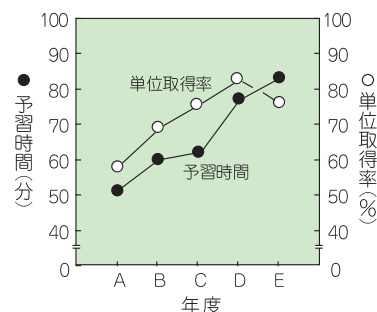
農学研究科 生物機能学専攻 市原 謙一 教授

この授業では、有機化学反応がどのようなメカニズムで起こるかということ、反応に関わる電子の動きを通して理解できることを目標にしています。しかし『隠された、ほんとうの目的』は、「化学」に対して自信を持ってもらうことです。化学のことなら少々のことを聞かれてもなんとか対処できる、またもっとレベルの高いことがらでも自分で参考書を読んで理解できる、そういうレベルにまで達していることを保証したいと思っています。

このような「崇高な」目標を持っていますので、講義に出席しているだけでは合格しません。しかし、取り立てて変わったプログラムを実施しているわけではありません。次週の講義範囲とその内容に関する教科書演習問題を研究室ホームページで通知し、当日の講義時間はじめにその演習問題をテストしています。それに続く講義はその演習問題をきっかけに進めるので、予習して問題を解いてこない講義内容を理解することはできません。ちなみに過去5年間の受講生で期末試験までたどり着いた人のうち、単位を取得できた人は73%でした。予習復習の合計時間は、期末試験勉強を除いて毎週平均1時間28分でしたが、単位を取得した人の勉強時間は2時間を超えていると思われまます。

この授業では、予習＝本勉強、講義＝復習、復習＝確認であり、それぞれにかけるべき比重は、予習60%、講義20%、復習20%くらいです。したがって、極めて単純なことです。予習時間の長かった人が多い年度では合格する人が多く、逆に予習時間の短い人が多い年度ではたくさんの人が落第するという結果になります（図参照）。

「予習をせずに受ける講義」というのは「教えてもらう」という発想であり、これは本当の意味で勉強ではありません。大学では、講義に頼らず、自力で学ぶという気持ちを持ってほしい。そして、自分の実力で単位を取得したという達成感を味わってほしい。それが、この授業で言えば、化学に対する自信一より専門的な授業を受けても、大学院に進んでも、化学系の会社に就職しても、理科教職についても一に繋がります。



化学通論の「予習時間」と「単位取得率」

注：年度Eで予習時間が長いのに単位取得率が少し低いのは、この授業方式を始めた初年度で試験問題が難しかったためである。

卒業生の声

ちょっと変わった人事の話

文学部国際文化学科 平成15年3月卒業 Y. W.
ダイワ精工株式会社 勤務

卒業と同時に地元京都を離れて早3年、私は現在東京にある釣り・スポーツ用品メーカーに勤めています。大学時代は欧米文学に力を注いでいた私ですが、英語を仕事にするよりも、趣味である釣りの業界で英語を活かしたいとの思いから今の会社を選びました。入社以来、仕事は人事関係を主に担当しています。一口に人事といっても幅広く、全社員の給料計算を筆頭に、福利厚生や慶弔事、役所への各種手続き、入退社や採用など「人」に関わるあらゆる業務が含まれ、部署間の壁を越えて社内を飛び回るのも日常茶飯事です。

社外一般のお客様を相手にする営業職とは異なり、人事部門にとっては従業員がお客様。その仕事の根本はなんといっても相手との信頼関係です。担当者本人の信用が第一に問われる業務だけあって責任重大ですが、その分、任されていることにやりがいを感じます。

こう書くと大学時代とまったく畑違いの仕事をしているようですが、実は私の担当範囲はそれだけではありません。語学好きに加えて根っからの太公望であることがなぜか社内に知れ渡っており、予想外の業務が飛び込んでくることがしばしば。文書の翻訳や海外からのお客様の相手を頼まれる日もあれば、数少ない女性モニターとして釣りのイベントに参加する日もあり、時には社内報の取材役として国内外の製品展示会にも顔を出します。

大学で学んだ英語が役立っていることはもちろんですが、まったくジャンルの異なる物事を経験できる面白さは国際文化学科で多様な文化を学んでいた頃のそれと共通するものがあります。何にでも興味をもっていればおのずとチャンスは巡って来るもの。給与計算で数字と格闘した翌日に海の上で魚と向き合う、そんな予測不能な毎日を楽しんでいます。

私とアロマセラピー

福祉社会学部福祉社会学科 平成15年3月卒業 M. H.

私が予防医療としてのアロマセラピーと出会ったのは、大学4年生の秋でした。社会福祉士国家試験に向けての勉強と卒業論文の執筆とに並行して、アロマセラピーの勉強を始めました。理論と実技の講習に通い、家ではテキストと自分の足とを見比べて足つぼの反射区を覚え、友人に何度もトリートメントのモデルになってもらったりして、無事にアロマセラピストの認定を取ることができました。

大学卒業後は、アロマサロンやリゾート施設内のサロンに勤務してたくさんのお客様と出会い、アロマセラピストとしての経験を積みました。が、時間やお金に余裕のある人だけのためのアロマセラピーではなく、だれもが気軽に日常生活の中に取り入れることのできるアロマセラピー、サロンに足を運ぶことのできない人たちのためのアロマセラピーを広めていきたい、と思うようになりました。

例えば、香りという刺激で脳を活性化させて認知症の進行を抑制したり、植物の力を取り入れることで病気になりにくい身体づくりができることが明らかになっています。アロマセラピーは薬とは違い全て自然の成分なので、副作用は一切ありません。アロマセラピーを活用することで健康づくり・介護予防ができることをもっとたくさんの人に知っていただき、そして実践してもらいたいです。

そのために、特定非営利法人（NPO）を立ち上げることになり、今はその設立準備に携わっています。今後は、各地でアロマセラピーのセミナーを開いたり、高齢者施設等でアロマセラピーを取り入れていただく際の提案・助言を行ったりと、予防医療としてのアロマセラピーを普及させる活動に取り組んでいきます。大学生活で得た知識と経験にアロマセラピーという手法を加え幅広い分野の福祉にアプローチできる仕事に、とてもやりがいを感じています。

京都の「まち」づくり

人間環境学部環境デザイン学科住環境学専攻 平成17年3月卒業

M. H.

私は今、京都市内で都市計画コンサルタントの会社で働いています。想像のつきにくい職業かもしれませんが、国や地方自治体などと、地域の実態を調査したり、問題があれば解決方法を提案したりする「まち」に関する仕事です。当たり前のことですが、私にはまだとても語り尽くせない、専門性が高く、奥の深い職業です。

私は、大学生活4年間を目一杯に謳歌しました。大学には、あらゆることへのチャレンジが無条件で許される自由があり、それを後押ししてくれ、認めてくれる人たちが近くにたくさん居ます。もし、求めている何かが無くても、自分から掴みに行けばいいというのが、私が大学生活で得た最も重要な考え方です。そこで、今「まち」に関わる仕事に取り組む際にも、「自分から動く」というスタンスは大切にしていきたいと思っています。

今、京都のまちづくりはとても熱い状況にあります。京都の「まち」には、京都の住人はもちろん、そうでない人々でさえも深い愛をもってしまい、守り育てたい魅力があります。また、私は英文系の高校に通っていたこともあり、世界における日本の状況という視点を持っていたいと思っているのですが、世界の中での京都のまちの特異性、文化的価値は世界にも引けをとらない、非常にレベルの高いものだと思います。

今も、京都の「まち」の現場は、課題や問題、そして地域住人の「こうしてみたい」、「何かをしたい」というチャレンジ精神で溢れています。「まち」が他者から何を求められ、又自身で何を求めているのかを丁寧に探り、戦略的に紡ぐプロデューサーになるべく、日々勉強です。

私はまだまだ駆け出しの、まちづくりの舞台の微力でしかありませんが、地道に自分の興味を深めて、全体からみた自分の追求すべき方向性を意識しながら成長していきたいと思っています。働きだしても、まだまだ勉強は続きます。好奇心を失うことなく、受け入れ態勢を十分に広げて進んでいきたいと思っています。

新しい天敵農薬の開発

農学研究科生物生産環境学専攻 平成17年3月博士後期課程修了 M. H.
(住化テクノサービス株式会社 応用生物部昆虫チーム 勤務)

私は京都府立大学および大学院で応用昆虫学を専攻し、卒業後、念願かなって農業関連ビジネスに携わることができるようになりました。勤務先は住化テクノサービス株式会社という会社で（相生市のど根性大根“大ちゃん”が入院していたところ）、私が所属する昆虫チームでは、①試験用昆虫の生産販売、②各種害虫に対する薬効評価試験、③天敵農薬の生産販売といった業務をおこなっています。天敵農薬とは、害虫防除用に販売されている天敵生物のことです。当チームでは、現在、アザミウマという害虫の天敵であるタイリクヒメハナカメムシを生産販売していますが、その他の害虫をターゲットとした天敵の開発にも取り組んでおり、私は、アブラムシの天敵農薬の研究をおこなっています。

アブラムシの天敵と言っても、 TENTUMシ、ヒラタアブ、クサカゲロウ、寄生蜂など、実にたくさんの種類がいます。この中から、どの種が天敵農薬として有望かを見極め、大量生産方法や製剤化方法を確認するのが、私の仕事です。現在のところ、学生時代の研究テーマであった寄生蜂も、候補のひとつ。飼育ケージはどのような形状がよいか？ 必要な餌の量は？ 生産した虫を詰めるボトルの大きさ、形は？…考えなければならないことはまだまだたくさんありますが、幸い、チーム内には多くの昆虫飼育ノウハウがありますので、それらを参考にしながら研究を進めています。虫を効率よく安定的に飼育するためには、その虫の性質や起こり得る飼育環境悪化の原因を熟知する必要がありますが、学生時代に積み重ねた多くの失敗も、今は大きな糧となっています。

天敵農薬は化学農薬と比べて生産コストが高く、価格が高いという問題があります。生物的防除が害虫防除法のひとつとしてより広く普及されるよう、天敵農薬を少しでも安く販売できるようにしたい。今は、新しい天敵農薬を最も効率的に生産できる方法を考案することで、その夢に近づきたいと考えています。

●● 担任奮闘記

人間環境学部環境情報学科 助教授 石田 昭人

本学に着任した私が初めて担任を引き受けたのは4年前。この春、彼らが無事に送り出すことが出来た。私が担任を引き受けるにあたって心に決めたのは、私を大学で育ててくれた担任の先生方と同レベルのこゝを実行する、ということである。私が学んだ大学では40人のクラスに教授、助教授、助手の3人の担任がついた。それぞれが、学生達の父親と、面倒見のよい叔父と、そして、兄の代わりを務め、学業から日常生活に至るまで、事細かに気を配って下さった。今から考えても、よくあれだけ熱心に我々の面倒を見て下さったものだと思う。もちろん、世界最高レベルの研究業績を挙げながら、である。大学の担任とはそういうものだ、という意識を叩き込まれていた私は、及ばずながら、思いつく限りのことを行動に移してきた。

まずは、新入生ガイダンスから。私はいきなり「自己紹介を最適化せよ」という課題を彼らに課した。聞く人が何を求めているか？ それを考え、提供する訓練の場としたのである。互いに採点させたのは言うまでもない。次に、クラス代表の責務と重要性を説明し、自ら名乗り出る者を募った。真っ先に高く手を挙げたのは私が4年間最も頼りにすることになる女子学生であった。彼女の積極性がクラス全体を引っ張ったことは疑問の余地がない。だが、劇的な登場の機会を与えなければ、彼女も力を発揮できなかったであろう。

その次に私が急いで実行したのは、手作りの宴会である。廊下に机と椅子を一列に並べて会場を作り、材料を持ち寄ってお好み焼きを作って賞味した。全員が協力しな



れば出来ないことをさせ、1人1人が主役になれるよう留意した。入学後はとにかく、すぐにこの種のイベントをやらねばならない。なぜなら、2週間もすれば、学生達がグループを作ってしまふからである。その前に、クラスとしての結束を高めてしまえば、グループが出来てもクラスの求心力は衰えない。実際、彼らは4回生になるまで毎年クラス全員で夏休みに旅行を楽しんでいた。

私が最も誇らしかったのは、彼らの強い結束である。その後は新歓合宿でのプレゼンテーション特訓、学期ごとの成績優秀者表彰、行き詰まってしまった時の相談、会社見学の実施、エントリーシートや面接の指導など、「もし、自分の子供だったら…」という意識を常に持ち続けるよう努力した。半分子供のようだった彼らが立派な大人になって卒業証書を手に巣立っていく姿は感無量であった。教え、教えられることの喜び。担任という役割がこれ程までに素晴らしいものだとは…。彼らと出会えたことを心から嬉しく思う。次の担任を持つのが待ち遠しい。

編集後記

「府大広報」刷新にあたって

広報委員長 佐々木 昇二

ご覧のように、新年度第一号に当たる本号より紙面が一新されました。広報委員会では、学長からの提言を受け、4月の本学ホームページのリニューアルに歩調を合わせて、情報時代における紙媒体の冊子として、より相応しいあり方を追求すべく、石田前委員長（上の記事参照）のリーダーシップの下、昨年来議論を続けてきましたが、その結果、このように画期的な改変に踏み切ることになった次第です。

まず、これまでの本学の年間スケジュールに即した発行形態を大幅に改め、特集記事を軸にして編集する。配布対象も記事に応じて、より広範囲にわたるよう柔軟に対応する。さらに、予算の許す限り毎号のページ数を増やし、フルカラーの印刷で発行する。以上が変更の骨子ですが、これに伴い、発行回数は従来の年間8回から3回（卒業特集号はこれまで通りの形で発行する予定）にしぼることになっています。

委員会では、大学の外に向けて広く積極的に情報を発信していくことを使命として、今後も引き続き広報誌の編集にあたってまいります。委員一同、学内・学外を問わず、多くの方々から読後の感想や意見をお寄せくださるよう願っております。

なお、11月発行予定の次号では、春・秋の桜楓講座をはじめとして、本学の地域貢献に関する記事を集めることになっています。ご期待ください。

府大広報 No.152 一入試特集号一 京都府立大学広報委員会 2006.07.29発行

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 Tel.075-703-5101 京都府広報物No.1802039